

菊池川流域の灌漑水路

菊池市周辺の肥沃な平野では、二千年前から大量の米が栽培されてきたが、17 世紀以降、井手と呼ばれる用水路の建設が始まり、栽培の効率と規模が飛躍的に向上した。この用水路は、菊池川や迫間川の水を乾燥した土地に運び、より多くの土地を水田にすることが主な目的であった。川の最上流に取水口を設け、そこから適度な傾斜で水を流す。途中の水田に簡単に迂回できるような遅い速度でありながら、最も遠い下流の水田にも水が届くような速い速度だ。井手の建設には、高度な技術力と地形への深い造詣が必要だった。

この地域で最も古い井手は、菊池川から西へ約 1km、市街地に向かって流れる築地（ついじ）井手で、現在は舗装された道路の下を流れるいくつかの支流に分岐している。菊池市役所前にはそのうちの 1 本があり、水車が景観を演出している。水路の水は家事や消防、レジャーに利用され、水辺は今でも散歩やサイクリングに人気だ。メイン部分の上流には、井手を作らせたと言われる大名・加藤清正（1562-1611）の像が立っている。

原（はる）井手は井手の中で最も長く、歴史的に重要なものであり、菊池川最上流から水を引き、山間部を横断する全長 11 キロメートル、約 500 メートルのトンネルを含む用水路である。この井手は、1698 年から 1701 年にかけて地元の庄屋の発案で作られ、菊池東部の丘陵地帯に棚田を作り、稲作を可能にした。原井手は現在も約 200 ヘクタールの農地の灌漑用水として利用されている。